
白いヴァニタス

全自動鎖骨店

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白いヴァニタス

【Nコード】

N9465W

【作者名】

全自動鎖骨店

【あらすじ】

『……僕たちは、本当は幽霊なのかもしれない』

ログアウト不能から既に900年が経過。現実世界と今も隔離されたままの電脳空間・ヴァルハラの大地では、異常進化を遂げたAIと人間達との間で戦争が続いている。

バーチャル空間でありながら妊娠さえ可能とした世界。プレイヤーの魂は本物か？

自らの存在に不安を抱きながら行商の旅を続ける少年ウルは、とある人物を助けた事により両者の争いへ巻き込まれてしまう。

不滅の番人・セーフガード。世界を浸食し続ける不気味な臓界塔。そして、ウルの子供の中に度々現れる謎の少女・一海。

現実と虚構の交錯の中、やがて紐解かれるは一つの家族の物語。そして、陰謀。

奇妙な運命に翻弄される少年はやがて、この世界に隠された残酷な真実へと辿り着く。

1 冬が来る（前書き）

1
1 / 1
再推敲

1 冬が来る

夢の中で、僕は大切な人のために一枚の絵を書き続けた。

僕の絵筆は世界を想像する。

出会って間もない頃彼女が僕の才能を見いだしてくれたお陰で、

最近はなんとかこれで飯も食えるようになった。

たとだときい言葉でありがとうと云う気持ちを伝えるより、僕は自分の作品で感謝の気持ちを伝えた方が効率がいいしその方が遙かに彼女が喜んでくれると知っている。

だからそのために特別な絵を描こうと思ってカンバスも新調して、絵の具まみれの手で一心不乱に筆を動かし続けた。

まもなく彼女が帰ってくる。

僕はおかえり、と言おう。

特別な人だから心地よい気持ちで迎えてあげよう。

まもなく絵は完成する。僕は仕上げのサインを入れる。

ドアの鍵が開く音が聞こえる。

高まる期待に胸を弾ませ、僕は彼女にこう言うのだ。

おかえり――

『かずみ』

唇がふと、その名を呟いた時僕は夢から醒めた。現実には暗闇の中にありそして顔に寒気を感じた。

ここはどこだっけ。

そうだ——馬車の中だ。

荷台は酷く狭く足を折り畳む様にして眠る木の床は恐ろしく今は冷たい。

カズミ。

夢の中のその人の名をもう一度僕は呟いてみた。けれど、当たりの様に現実感稀薄で、もちろん僕はそんな人の事は知らない。夢という物は本当に残酷で、僕はその人の顔さえ、もう既に思い出せない。

ひょっとしたら僕の母さんかも知れない。

淡い期待を、馬鹿馬鹿しいと打ち払う。もう一度目を閉じた。

兄さんが僕を起こしに来たのはそれから間もなくの事だ。

不意に馬車が止まり幌が開かれる。外からの冷たい風と共に、兄さんの声が僕を呼ぶ。

「ウル。交代の時間だぞ」

「……もうそんな時間？」

片手に提げるランタンの光が眩しくて、僕はやや首を背けながら訊ねた。夢のせいか時間の感覚がひどく曖昧な物になっていたらしい。

「三十分前にも一度声を掛けたんだが」

「え？」

やや苛立ちを含むその言い方に、僕は失態を犯した事に気付く。

——またやってしまったか！

「ごめん！　すぐ起きるよ！ー！」

冷や水に打たれたかの如く体はすぐさま反応。慌てて毛布を跳ね除ける。

兄さんの細い唇から、溜め息が一つ零れる。

「外、冷えるからな。しっかり着込んで来いよ」

踵を返した後に、ランプの明かりだけが馬車の中に残された。

「……どうして起きれないのかなあ……」

自省する様に、深い、深い溜め息を吐く。吐息は白く霞み僕の前を流れてゆく。

季節は十一月の終盤。

僕は手をさすり脇に置いていたコートを羽織る。

マフラーも必要かな、と思いそれに手を伸ばしかけた時、隣から小さな吐息が聞こえた。

サヤはまだ眠っていた。

抜ける様に白い肌が印象的な少女は、僕の幼なじみだ。

壁に身を預けるようにして彼女は毛布にくるまる。

ほんのり顔には赤みが注している。まだ熱は下がらないのだろうか。

「サヤ」

一度呼びかけてみるが彼女はまだ目覚めない。

絹系の様に細い彼女の前髪を僕はそつと掬くい、白い額に手を触れてみる。

——まだ、微かに熱い。

もう暫く休ませてあげよう。

僕の分の毛布を肩にかけてあげ、やがて外に出る。
身を切る様な寒さだ。

仲間達は凍え松明を囲み僕を待っていた。

「遅いぞー。ウル」

寒さに足踏みをしながらラッドが僕を睨んだ。

「ごめん。また寝坊した」

「またかよお。本当頼むぞ？　たくよお」

不満を漏らす彼にもう一度ごめんと頭を下げ、それから大人達にも謝る。

「あれ？　お姉ちゃんは？」

何で居ないの、と甘えん坊のカナが首を傾げ僕に訊ねてきた。

「うん、まだ熱が下がらないんだ」

僕は事情を説明する。

「具合、悪そうなのか」

タベはずっと咳ばかりしていたしな、とラッド。

「カナ、お姉ちゃんに風邪移しちゃったかなあ……」

不安げに馬車の方を見つめるカナの頭を、優しく撫でてやった。

「カナのせいじゃないよ」

元々サヤは体が弱かった。

「いい加減起こしたらどうなんだ」

剣呑な口調で唐突に兄さんが僕達の会話に口を挟んできた。

「——ちょっと!? 兄さん!」

僕は慌てて声を荒げた。

「本気で言ってるの? まだサヤは調子が悪いんだよ」

本当にか? と疑う様な眼差しで兄さんは僕と向き合った。

「俺がさっき診た時は大分下がっていた気がするぞ」

「そんなの当てにならないじゃないか」

知らず、つい声を荒げていた。兄弟喧嘩にならないかと「おい、ウル」と仲間に肩を掴まれる。僕はラッドの腕を振り払った。

「兄さんはサヤに冷たすぎるよ」

時々情に欠ける兄さんの言葉に僕は納得が行かない事がありこうして意固地になる。

大抵それはサヤの事絡みだ。

でも、幾ら叫んでみたところで決して僕の声は兄さんには届かない。

冷徹な僕の兄は、やがて突き放す様に僕にこう言ってきたのだ。

「みんな疲れているんだぞ。お前の依怙贔屓でこれ以上振り回されてはたまらん」

依怙贔屓だつて？ そんなつもりは毛頭無い。

違う、と言いかけた僕の口を先回りして兄さんの声が塞ぐ。

「違う、って言いたげな顔をしているな」

当たり前だよ。

冷たい瞳が尚も僕を苛立たせる。

「僕はただ、サヤが体が弱いから心配なだけで――」

「それも承知の上で着いてきたんだろぅが」

水掛け論だ。

しつこいぞ。どっちがさ。

険悪な雰囲気募る中それに打ち止めをかけたのはラッドのこんな一言。

「そついや姉御、さつき捻ったって言った足。大丈夫？」

話題が突然他の者の事に及び、僕は背後を振り返る。いつもは気の強そうな顔をしたエイザが、ちょっと困った表情を浮かべている。

「うーん、実は正直、結構痛いんだわ。これが」

「無理をするな」

休んでいていいぞ、と兄さんが肩を貸し彼女を馬車に連れて行つた。

次の交代はちょうど兄さんとエイザの番だ。
結局二人が乗る事で、荷台は定員となり必然的にサヤは降りねばならない。

「あのね。さつきクラウドも怪我をしたの」

そつとカナが教えてくれた。

一時間程前獣と戦闘があつたらしい。

この街道にはよく狼が出る。カナが教えてくれたからこそ、僕はそれを知る事が出来た。

兄さん達に守られている。

今までそれに全く気付かず、ただ眠りに耽っていた事に僕は強い
気まずさを覚える。

「……っ」

迂闊すぎる。

仲間の事を省みていない。

サヤの事ばかりに気を取られ、僕は周りが見えていない。

「あのよお……」

別にクラウドの肩を持つ訳じゃねえけど——、とラッドが僕に話しかけてきた。

「やっぱり俺も、ウルはサヤの事依怙贖してる部分あると思う。
それってサヤの為にもあんま良くないんじゃないかね？」

ラッドの方が僕より遙かに物わかりがいい。

「そうだね……」

自己険悪に陥りながら僕はサヤを迎えに行った。
どうしても顔は俯き加減だ。

暗い顔をしてとても病人を励ます余裕など無い。
だから僕は自信を喪失していた。

……僕の優しさがサヤを傷つけているのだろうか。
自問自答を繰り返す。そんな事をすれば益々気は滅入るばかりだ
と云うのに。

不器用だな。

今、十六歳になったばかりの僕は兄クラウドに率いられ行商の旅
に出ていた。

今回の目的地は北の都エンリルだ。

年々拡大する浸食の被害に合わせギルドからの依頼がなくなっ
てきている。

大切な取引を兄さんは逃したくないと言う。約束の期限は明日へ
といよいよ迫っていた。

寒さが身に凍みる。仕事があれば僕たちは全員路頭をさまよう
事になる。

飢え死になんて御免だ。

みすばらしく死ぬなど僕達のプライドが許さない。
最後まで、足掻くんだ――

取り留めのない思考をさまよっている間に馬車の前に着いた。

「サヤ、交代の時間だよ。起きて」

僕は、彼女の肩を揺すり起こす。

「ごめん……」

それでも無理をさせていると云う罪悪感からか、目覚める彼女に
かける一声はひどく萎んでいた。

君を、まだ守れなくてごめん――。

せめて、これ以上風邪をこじらせない様にと、僕は自分のマフラ
ーをサヤの首に巻く。

「……ウルはいつも謝ってばかりだね」

白い吐息が僕の目の前を流れてゆく。

気まずげな僕の態度に何かを察したのだろう。

慰める様に、サヤは弱々しく僕に笑いかけてくれた。

それがちくりと僕の胸にまた痛みを残すのだ。

自分の弱さがもどかしくて、目の前の少女から僕は視線を逸らす。

「……ウル？」

「みんな外で待ってるから。行こう――」

立ち上がるサヤの手を取る。サヤの指先はぞつとするほどに冷た
い。今にも儚く消えてしまいそうな程に。

「そんな悲しそうな顔しちゃ、駄目だよ」

早く大人になりたい。

あの夢の中で見た、幸福な誰かの様に大切な人を護れる位の強さ
が僕は欲しい。

でも、それを手に入れる為これから僕はどうしたらいいのだろう

ぽきりと、枯れ枝を踏む音がブーツの底から響いた。

…… 本当は、分かっていた。

僕ばかりが悪いのでは無い。

自己責任ならびに自己管理。

それこそが冒険者にとって鉄則のルールで、今回の旅がサヤにとって不向きだって事を、サヤ本人が一番分かっていたと云う事実。身体の弱いサヤは、パーティーの足手まといになる。

それでも賢明に努力する健気さが、たまらなく愛おしいと僕の心を引きつけてゆく。

待っていて、と僕にはサヤを引き止める事も出来た筈だ。

それなのにサヤを許してしまったのはどうしてなのだろう。

…… 僕たちがお互い孤児オーファン
ファミリイだから？

それとも、絆で結ばれた家族だからだろうか？

産まれた時から親は僕たちの面倒なんか見る筈も無く、そもそも愛情なんて欠片も持ち合わせていなかった。—— 神にも恵まれていない、可哀想な僕ら。元々そういう境遇だから……。

否、それ以上にこの世界でクエストに参加しているほぼ全ての冒険者たちが、生まれつき身寄りの無い、孤児（みなしご）オーファンだ。

僕たちは予め存在すら否定された、まるで生きる屍の様。

寂しさに拍車を掛けるかの如く、空は次第に暗さを増してゆく。

「サヤ。歩ける？」

冷たい腕を取りステップから僕は彼女を降ろした。一際寒い風が足下に吹き付けてくる。

指が。かじかむ。

今年の冬はいつもより厳しくなりそうだ。

青みがかった唇の先から、サヤは白い息を吐き出してミトンを暖めていた。

「聞こえるわ……」

不意にサヤが立ち止まった。遠く一点を見つめて彼女は言う。

「臓界塔が……泣いている」

そつと呟いたかと思うと、おおんと海鳴りに似た不気味な振動が風に乗る僕の耳にも届いてきた。

「世界が嘆いているんだ……」

儚く消え入りそうな声だった。憂色を帯びた瞳に僕は心が痛んで。

「サヤ」

僕は彼女の名前を呼び、手袋越しにその細い指を強く握り締めた。軋む程に。

僕らが決して、残酷な運命で離ればなれにならないように。

2 孤児達の隊商（オーファンス・キャラバン）（前書き）

9 / 2 4 加筆修正しました

2 孤児達の隊商（オーファンス・キャラバン）

こほ、とまだ顔の熱いサヤが咳を切らす。

「サヤ、大丈夫？」

僕が訊ねると彼女は小さく頷いて、それから僕の腕を引き気丈に前へと歩き出す。

僕らの足下には街道の落ち葉が降り積もっている。

両脇に覗く木々は裸の痩せた幹を延々どこまでも続かせ、まるで死者の行進みみたいだ。

暫く歩くと、廃線のレールの上に、鹿の死体が倒れていた。獣に襲われたのだろうか。

この寒風の中、無惨に腸とあばらを覗かせている。

「可哀想……」

死体をじつと見つめるサヤの手を引いて、僕は前へ前へと進む。立ち止まっていけない。

風が、僕の心を冷やしてゆく。

そうだ——スープを作ろう。きっと暖まる。具は何がいいかな？ 鴨肉、白蕪、人参にじやがいも——市場で買ったハーブはまだ残っていただろうか。僕は材料を頭に思い巡らせた。

北風に弄ばれ、三つ編みに編んだ灰色のサヤの髪が揺れている。それを僕の瞳は見つめていた。

ねえ、と僕は細い背中語りかける。まだサヤからの返事は無い。

森は鬱蒼と茂り、陽は彼方に落ちていった。夜はとても危ない。僕はマツチを擦り、松明に火をを灯す。

赤々と燃える灯火に照らされ、皆の輪郭が浮かび上がった。

一番の年長者、白髭のジョエル。馬主でここら一体の土地に詳しい。

それから御者の力ナ。まだ九歳ながら馬の扱いに長けている。彼女と僕とサヤ、そして相棒のラッドは共に同郷の幼なじみだ。

サヤとラッドは飛び抜けて肌が白い。

聞いた話に拠れば、正規の世界で白人は既に滅びかけていて、大変な貴重種らしい。

そんな彼らだから、もし二人のアカウントが取れば、プレイヤ―が飛びつき金を落としてゆくだろう――そういう噂が世間に飛び交っている。

何れにせよ、それはまだサーバーが生きていればの話だ。この世界が現実と断絶されて久しい。

最早伝承と化した御伽話……僕らと関係があるとは、到底に。思えない。

ついでにラッドは、パーティの中で一番陽気で賑やかな奴だ。

「寒い。ああ寒い、畜生。何で俺だけ毎回こんな酷い目に……」

そして寒がりな彼は今、僕の隣で恨みがましく文句を呟いている。

「なあウル。ちょっとそれ当たらせてくれよ」

「やだよ」

彼は僕が手にする松明を指さしてきた。すかさず断り、遠ざける。

「なんだよお前!! ケチだな!？」

「だってラッドさ、僕がこれ貸したら独り占めするつもりだろ？」

僕の指摘にうつと彼は喉を詰まらせる。どうやら図星だったみたいだ。

……やれやれ。

それでも懲りないラッドは、今度はカナに詰めると無理矢理御者台へ割り込もうとする。どれだけ我が儘なのか。

「コラ！」

流石に度が過ぎたのか、荷台の中から誰かの逞しい腕が延び、彼の首根っこを捕まえた。

「うわ！？ わわわ」

そのまま宙づりになり、ラッドは馬車の外へと放り出される。

「痛つてえ！」

地面に尻餅を着いた。

「なにすんだよ姉御！」

「ズルはいけないよ」

抗議の声を上げたラッドを、中から現れたエイザが凄みを利かせて睨む。

「だつてさ……」

「男ならぐだぐだ言わない。分かったら返事は？」

「……了解っす」

有無を言わせぬ鶴の一声に、まるで躡られた飼犬よろしくラッ
ドは頭を垂れる。流石だなあ……。

「よし！」言う事を聞かせてエイザは満足そうだ。

「おお怖い怖い」

二人のやりとりを盗み見してジョエルが、わざとらしく肩を
竦めた。

「馬鹿だろ。あいつ」

僕が呆れて言うと、「ラッドだから仕方ないよ」とサヤもまたお
かしそうに隣で笑っていた。
なるほど。そりゃ確かに。

オファンス・キャラバン
孤児たちの隊商。

生まれつき身寄りの無い孤児たちが集まり、家族となる代わりギ
ルドの依頼をこなす。旅する傭兵。産まれながらのジプシー。放
浪者。

そういった冒険者たちがこの世界には溢れている。

臓界塔は壊れているらしい。

巨大AI。リアル・ワールドとの中継地点——謂わば、サーバーの役割を果たすこの塔へのアクセスはここ数世紀完全に途絶えていた。リアル・ワールドは最早崩壊の危機に瀕しているらしい。『ヴアルハラ』の名が示す通り、ここは電脳空間でありながら人類に残された最後の楽園なのだろうか……。

アカウントさえ取れば誰でも接続可能な、夢と感動、興奮溢れる冒険ファンタジー・ワールド。

接続期限は無制限。

かつては十五億もの人々が参加していた広大な電脳空間も、今や荒廃の一途を辿り、生き物の気配さえ久しい。

「お通夜みてえな顔してんじゃねえよ」

不意に横から掛けられた声に、はっと僕は我に返った。ラッドが急に、僕の肩へと腕を回してくる。

「ウルは辛気くさいなあ。そんなんじゃ女にもてないぞ？」

うつりうつり、と頬をつつきながら僕に訊ねてくる。余計なお世話だよ。

自他共に認めるプレイボーイ。ラッドの陽気さの根幹にあるのは、異常なまでの女好きにあるのだと皆は知っている。

数珠つなかりのピアス。胸や首に覗くアクセサリ、それから頭に巻いた真っ赤で、派手なバンダナの類は、全てこれまでに口説いた女の子からの戦利品なのだとは彼は自慢していた。武勇伝、イコール女に直結するのが僕の知るラッドと云う若者の全てだ。

「そんな訳ないだろ」

僕は平静を装い彼に答える。

ラッドが僕に絡んでくるのは、大抵暇な時だ。

一方そんな時の僕と云えば、よく考え事に耽っているから鬱陶しくて仕方がない。大抵だんまりを決めて僕は聞き流す。

それに本来、僕はお喋りが苦手なのだ。

「お前さんは堅物だからいけないよ。ねえおやっさん？」

僕や兄さんを初めとして、このパーティには寡黙な者が多い。

「そうかも知れないな」

ラッドが話しかけた先には、白髪の男性がいる。目深に被った鰐広帽の下で、ジョエルは苦笑いしつつ彼に答えていた。

「でしょう？」

おやじさん、と皆から慕われているジョエルとラッドは昔から妙に馬が合う。昔亡くした息子の面影を彼に重ねているからだだろうか？巡回牧師をしているジョエルの、それは罪滅ぼしなのかも知れない。

彼の過去に何があったのか。

誰も、何も。聞きたがらない。

冷える夜だった。

「——でも、お前さんよりはウルの方が女に誠実だと俺は思うぞ？」
胸元から骨董品のオイル・ライターを取り出し、それで火を点けながらジョエルは言葉を続けた。

「特に、そちらのお嬢さんには」

意味深な含み笑いを覗かせ、煙を吐いた後に示したその先にはサヤがいる。

彼女は気丈に歩いていた。

からかわないでよ、と僕は言う。

サヤの頬にほんのり赤みが注っていて、それが風邪の所為では無い事を僕は知る。

黒いリボンが、風に揺れている。熟したオリーブのような緑黒の瞳が、僕を見つめてる。

気持ちは通じ合っていた。

「何か熱く無いスカぁー？」

如何にもわざとらしく。ラッドが僕の肩をがくがくと揺さぶって、

「結婚しちまえお前ら！」

ひゅーひゅー、と一人賑やかに囃立てていた。

「離せよ」

困った顔でラッドを引き剥がしている間に、後ろから来た馬車に僕は追い越された。

静寂にホウと、梟の鳴き声がどこからか聞こえていた。

3 簡略詠唱（バースト・スペル）

「お前たちも吸うか？」

ジョエルから勧められた煙草は、僅かにラムの香りがした。

深く吸い込むと喉が焼かれそうで、一口目で僕はそれを唇から離れた。お子さまだなあ、と二人から笑われる。ラッドはもう既に二本目を催促している。

獣道が、暫く森の中に続いていた。道に迷ったらしい。

腰に提げた方位磁石が、くるくると円を描いて一向に北を指さない。

「ああ、こつちも駄目つすわ」

GPS機能の役割を果たすギルド発行の大陸地図。それを開いた途端に、ラッドは嘆いた。

魔法の効果が薄れて来たのはこの森の所為か。それとも、臍界塔のエラーか。

頼りにならねえなあ。ひとしきり文句を告げた後、ラッドは馬車の方へ向かった。兄さんたちに意見を求めるのだらう。程無く、相談が纏まった。

「お泊まりです」

ラッドの声で今夜は野宿になった事を知る。ちらりと僕はサヤの方を伺う。出来れば今日は、宿に泊めてあげたかったのだが……。

「心配いらないよ」

そして、遠慮がちに微笑むサヤの姿にちくりと胸が痛む。僕はサヤに優しすぎるのだろうか……。

「何ボサっとしてんだ。お前も手伝え」

背後からジョエルの声が掛かり尻を叩かれると、もう既に皆はテントを組み始めていた。

野営に必要な道具一式を、次々と荷馬車から降ろして行く。カナは活き活きと皆の手伝いをしていた。

竈の火を起こすのは女たちの仕事だ。風向きを考え、石を積み上げ中に薪を組む。少し穴を掘って置くのがコツ。

「呪文で点けてもいい？」

カナは最近魔法を覚えたばかりで、ここぞとばかりに練習に励むようになった。読み書きが出来るのはジョエルのお陰だ。

「危ないから止めておけ」

尤も、それで火を起こせるのと操れるのは別。口頭コード入力に必要な教本を、兄さんが横から取り上げる。「お前はまだ覚えたてだろう」

サーバ経由で仮に使用権限が下りたとしても、それを自由に使いこなすには更に複雑な知識が求められる。使い方を知らねば唯宝の持ち腐れとなるのは機械と一緒だ。好奇心旺盛なカナには、それがまだ分らないのかも知れない。

「むー」と膨れっ面をして、彼女は本を取り返そうとした。けど、その手が届くにはまだまだ背丈が足りない。

「クラウドスの意地悪！」

ぴよんぴよん飛び跳ねる度、すみれ色の髪はふわふわと揺れる。
必死な仕草もどこかコミカルだ。二人のやりとりが、僕たちの笑いを誘う。

「まあまあ」

怪我したら大変でしょ？ とサヤが横から宥める。
でもそれは、最近調子の悪いサーバーの事を危惧しての発言かもしれない。

「いい娘じゃないか」

聡いエイザは、その事をも含んだ上で、薪割りをしていた僕の横腹を突く。お陰で手元がぶれた。

「気遣いが上手いんだよ。サヤは」

そう。懸命に努力をする事がサヤの美德だ。
分かっている。誰だって、自分をよく見せたいんだ。
長所くらい持たないと、人は人から認められない。

「……寂しい事だけれどね」

「ん？ 何か言った」

「いいや」

エイザの問いかけに僕は首を振って、また元の作業に戻った。角の欠けた薪の一切れを、切り株の上に置く。

「それにしても……今晚は冷えるね」

ぶるつと腕をさすり、薄着のエイザは上着を取りに行った。雪になるかもしれない。僕は目を瞑り、想像してみる。深々と雪が降り積もる、純白に覆われた——音一つ無い光景を。それは寂しい世界だ。

吐く息が闇に溶けて行く。

焚き火の炎に照らされた、真つ白な水の粒子。官素子^{ヒクセル}が見せる業電子的に構成された、全てが虚像。虚構の世界。空気の冷たささえも。焚き火の暖かさも。僕のこの声も。思考も。サヤを好きだという感情も。僕たちの、この命も——

星の瞬き一つさえ無い暗い夜の中で、僕は思考の海に溺れた。いけない。

指先にさくりと熱い熱が走って、はっと我に返った時、指の皮が剥けていた。鉋で切っていたのだ。

「痛」

「おいおい、お前大丈夫かよ」

通りがけにラッドに見られた。

「平気だよ……」

「血、結構出てんじゃないか。無理すんな」

「おい、サヤとラッドは声を掛けた。」

「どうしたの？」

「ウルの阿呆が指切った」

どうして憎まれ口を叩くのかな。こんな時に。

「見てやってくれよ」

どれ、俺が代わる。と言ってラッドが僕の腕から鉋を取り上げた。

「痛むの？」

「大した事無いと思うけど……」

「化膿したら酷い」

サヤは医術の心得がある。簡単な傷なら魔法で治した方が早い。

「動かさないでね」

患部を指で押さえたまま、サヤは口元でバースト・スペル（簡略詠唱）。

これは、一刻を重んじる医療系魔術に於いてよく見られる高等技術。但し、そこには若干効果が薄れるペナルティがある為使い分けが肝心だ。

「……まだ、痛む？」

ほんのり指先が熱い。サヤが僕の様子を伺う。殺菌の為の、熱処

理が始まったのだ。

「いいや」

青白い光の奇跡を見つめながら、僕は首を振って答えた。

「気持ちいいよ」

「お前が言つとなんかエロいな、それ」

「冷やかさないでよ」

茶々を入れるラッドにサヤが僕を庇った。何となく、恥ずかしい。不意に僕はサヤから目を逸らす。

止血。同時に癒着が始まった。体液の所為で少しべとべとするけれど、不満を言ったらサヤに悪い。終わるまで僕は口を閉ざしていた。

「終わったよ」

「うん……ありがとう」

申し訳なさを含めて僕は礼を言う。サヤの指が離れて行く一瞬が、少し名残惜しかった。ラッドの冷やかしも案外的を得ていたかも。

「サヤ、ここはいいからあんたはもう休んでいな」

ハイネックを着たエイザが何時の間にか戻ってきていて、サヤに声を掛けた。

「私は大丈夫」

「無理をしないの。明日、山越えだからひびくよ?。」

無論、それは彼女の身体を気遣つての事。オゼの山道は今のサヤには特にきついだろう。

「薬があれば良かったんだけど、生憎切らしているからね」

「……ご免なさい」

「謝る必要なんか無いって」 けらけらと笑い、悪い時に風邪に当たっちゃっただけよ、とエイザはサヤに告げてテントへ連れて行つた。

「今日の姉御、優しくね?」

ラッドが後ろ姿を見つめながら言う。

「いつもと変わらないだろ」

ラッドはいつも怒られてばかりいるから。

一見さばさばしている様に見える（実際そうだけれど）、意外と面倒見が良いからエイザは頼られる。僕たちと十程彼女は歳が離れている。

オバサン、って言ったら、速攻はっ倒されるけれど。勿論怖くて言えない。

「お前、ここは良いからさ。カナの方面倒見てやってくんね——
——って……」

突然言い淀み、一体何事かと顔を向けた先には、大きな羽虫を鍋にぶち込もうとするカナの姿が……。

あいつ一体何を作る気だ……。

隣のラッドは既に顔面蒼白状態だ。

「止めろおお！」

奴の暴拳を今直ぐ止めろおおおお！！」

カナの味覚は相当に（……）おかしい。

叫ぶラッドに言われるまでも無く、僕は慌ててそれを止めに走った。

4 流星と炎

焚き火を囲んで僕たちは、やがて夕食の席に着いた。

「それは災難だったね」

あらかた料理も食べ終えて、今は和やかに団らん中。先程の騒動を耳にして、サヤはくすくすと笑っていた。

「笑い事じゃねえよ。俺たち、下手すりゃ羽虫のスープ飲まされてたんだぞ？」

「そうそう」

さっきの事を思い出し、僕とラッドはうんざりした表情を浮かべていた。問題のカナ本人は、今は兄さんの隣でお代わりの真っ最中。カナは食欲旺盛だ。忙しく料理をかき込む中で、

「ほら、そんなに急いで食べたら咽せるぞ」

兄さんがカナに注意している。歳が離れている所為もあってか、あの二人が並ぶとなんだか本当の親子みたいだ。今晚の調理は僕が担当した。メインは根菜のポトフに猪肉のソテー。主食の黒パンにデザートは焼きリンゴ。ちょっと奮発して、今夜は赤ワインも付けた。僕はそんなに飲めないけれど、明日の山越えの為みんなには英気を養ってもらいたい。

「旨いな……これ」

いつもゆっくり食事を取る兄さんが、黙々と食べてながらぼつり
呟いた。

「でしょう!」

何故かカナは得意げな笑み。

あいつ、殆ど料理には触れてないぞ。僕とラッドに注意されからは、ずつとふてくされて悪戯ばかりしてたし。調子のいい奴だ。

「ウル。コーヒー、まだ残ってるか?」

ジョエルから聞かれて、僕はポットの中を覗いた。

「もう殆ど無いや」

挽いた豆で淹れるドリップコーヒーは、ジョエルのお気に入りだった。

「まだ飲みたいなら淹れるけれど……」

「いや。あれば良かったから別にいいぞ」

そう頷いて親父さんは使い終えた食器を下げた。

「ふわぁ……」

その横でエイザが大きな欠伸をした。

「流石に疲れたわね」

「明日はもっとキツイぞ」と兄さん。

「そうね。……御免、あたし先に休むわ。洗い物、あんた達宜しくね」

そう告げてエイザは先にテントへ戻っていった。

「姉御いつも片づけ手伝わねえし……」

「まあまあ」

不満を零すラッドを宥めて、僕はみんなの食器を片づけ始めた。

風が暴れている。夜中を過ぎてまた風が勢いを強めてきていた。その所為だろうか。眠れない。目が冴えて何度も寝返りを打った。暗いランプの灯が天井を仄かに照らしている。

「眠れないのか？」

隣で本を読んでいた兄さんに声を掛けられた。

「……うん」

頷き、そちらへ振り向く。読書の時だけ兄さんはいつも眼鏡をかけていた。線の細いフレームは兄さんの印象を更に冷たく変える。

「風、煩いね」

嵐が近づいているのかな、と不意に思った。地元の猟師たちは、確かこの様な晩を「神様が咳をしている」など例え畏れていた筈だ。何かが起こるのだろうか。心がざわついている。

何故か胸騒ぎが絶えない――。

今夜は不気味な夜だ。「俺もなんだか眠れない」

読みかけの本から目を外して、兄さんが目元を摘みながら言った。風にたわむ天井を見上げる。

「……コーヒーでも淹れるか」

「眠れなくなるよ?」

「一杯だけだ」

お前も付き合わないか? と僕に訊ね、兄さんは上着を取ってテントの外へ出て行った。この寒い中物好きだなあ。

けれど、僕も急に尿意を覚えて結局兄さんの後を着いていった。

雲が速い速度で流れていた。

その所為で月明かりが零れ、外は思ったより明るい。

見上げた空に皓々と星が瞬いている。あれはグリフォン座。魔女の茨。東の風琴座。

黒い静寂。そこに広がるのは幻想の宇宙。

きれいだ。思わず声が零れる。夏なら絶好の天体観測日和だろう

に。

そう……、ふと思い付いた途端、僕の脳裏に過去の記憶が蘇った。あれはもう十年以上前の事か。

子供の頃育った孤児院の庭で、毎晩僕は流星を待っていた。

あの頃はまだ、この世界が虚構で造られているなんて僕は知らなかった。

歳の離れた兄さんは、その頃もう冒険者だった。先生の言いつけを破り、「本当の事」を知るため外の世界へ出て行ったのだ。

——兄さんはいつ帰ってくるの？

幼い僕の質問に、先生はいつも悲しい顔を浮かべていた。先生はもう兄さんが戻らない事を知っていたのかも知れない。

流れ星に願いを託して祈れば、きっと叶う筈だと僕は信じていた。

それを教えてくれたのは、共に孤児院で暮らすサヤだ。

後からやってきたラッドを含めて三人、僕たちは毎晩、夜空を見上げては流れ星を探した。願った数だけ、早く兄さんが僕の下へ帰って来ます様に。

危険な旅で傷つく事無く、無事ここへ戻ってこれます様にと——
……。

三年、祈った。

そして僕が八つになった時、兄さんはカナを連れ僕たちの下へ戻ってきた。

森に捨てられていたという、赤子のカナをその腕に抱いて。

「俺がこの子を育てます」

兄さんはあの日先生の前でそれを誓った。

僕たちオーファンズ・キャラバンは、そうして兄さんの誓いを叶

える為にこの日誕生したのだ。
カナを守る為に――。

熾^{おき}の火の粉がまだ弾けて宙に舞ってゆく。その静かな様子を、ただじっと見つめていた。

「ウル、コーヒー淹れたからここに置いとくぞ」

「うん。ありがとう」

風に乗って舞い上がる火の粉は、やがて視線の先儚く消えた。まるで蛍の様に。　　ま

「何を考えていた？」

「ずっと、ずっと昔の事――」

こうして兄さんと二人きりで話すのも珍しい事かも知れない。

「そうか」

兄さんは静かに頷いて、熱そうにコーヒーを啜った。

「……俺たちが旅に出てもう何年目だ？」

「ちやうど九年だよ。カナを連れてきた年だから」

「そうか……もうそんなになるのか……」

早いな、とどちらから言う訳でも無く、自然二人の声は重なった。

「……カナの事なんだが」

兄さんには珍しく、ちょっと躊躇うような間がそこにはあった。

「……何？」

「来年になったら、カナをギルドに入れようかと思っている」

「まだ九つだよ。ちょっと気が早すぎるんじゃない？」

平均どんなに若くても、ギルドへの登録は12か13歳くらいが相場だ。

「あいつは才能があるからな。それに、実戦だつてもう十分経験済みだろ」

「そりゃあの歳で見たら相当早熟だけどね」

冒険者としての価値は、何も戦闘能力一点だけに限る訳では無い。むしろ豊富なサバイバル能力の方に重点が置かれる。僕はちよつとその事も踏まえ考えてみた。

ふむ……。確かにそう考えると――……。

物怖じしないカナのあの性格は、冒険者にうってつけなのかも。元々カナはずつと僕たちと旅暮らしをしてきた訳だし……ひよつとしたら行けるかな？

「……うん、お遣い位なら大丈夫かもね」

あいつ、思ったよりずっと遅しいし。
考えた末に僕も同意した。

兄さんも意外とみんなの事考えているんだな、とちよっぴり関心。

「へへへ」思わず頬が弛む。

「何だよ急に。気持ち悪いな」

「大した事じゃないよ」

胸のつかえがようやく取れた気分。

「……おかしな奴」

兄さんはまだ納得がいかない様子で、ちよっぴり眉を顰め僕の顔を見ていた。僕は苦笑する。

「……そろそろ寝るか」

「そうだね」

兄さんに訊ねられ僕は顔を上げ、火を消そうとした。

「——こんばんわ」

不意に声を掛けられたのはその直後だった。

4 流星と炎（後書き）

10 / 3 推敲

5 真夜中の旅人（前書き）

10 / 3 修正加筆

5 真夜中の旅人

誰だ。

二人同時に振り返る。はつとした拍子に、体は無意識の内に動き早撃ちの如く剣を抜いていた。

「——うわっ!？」

二つの軌跡が空を風ぐ。

悲鳴が僕の耳を突いた。

闇討ち、という事もある。夜盗の襲撃に備えて、僕たちはいつでも剣を抜く癖を身に付けていたのだ。

「……誰だ。お前」

切っ先が相手のコートの裾をほんのわずかに掠めていた。

目の前で尻餅を着いて倒れた相手を見下ろし、静かに兄さんが口を開いた。

「……怪しい者じゃないですよお」

やがて戻ってきたのは、そんな情けない男の悲鳴だ。

「……どうやらそうらしいな」

剣を収めた兄さんに続いて、僕もまた彼を見下ろした。……旅人？
全身黒ずくめの衣装に身を包んだ彼は、郵便屋を想わせる紐の長い鞆を提げていた。肩には白い腕章が覗いている。

「どうぞ」

「あ、こりゃどうも」

起き上がろうとする彼に僕は手を差し出した。

「いてて……腰打った」

罎の深い帽子の陰から覗くその素顔は、金髪で驚く程整っていた。歳は僕より一つか二つ上くらいだろうか。

「……NPCか」

探るような視線で兄さんがそう述べた。

NPCとはノン・プレイヤー・キャラクター……システムが管理するこの世界の元々の住人。謂わばAI（人工知能）の事だ

「ええ。そうですけど……それが何か？」

裾を払う彼に僕が代わりに訊ねた。

「その腕章、調査団の物ですね？　こんな僻地で何をしていたんですか？」

「いやあ」

彼が照れくさそうに頭を掻く。

「お恥ずかしながら……道に迷ってしまいました」

調査団は現在続発するエラーに応じて、土地の観測・及び修正作業を行う役割を与えられている。

「ここ二日間ずっと森の中をぐるぐる回りっぱなしな訳で。都合良く人に出会えて本当によかった」

先程の事など微塵も覚えてはいない。そんな印象を抱かせる人懷つこい笑みを浮かべていた。

「道に迷ったって……やっぱりまだ抜けられないんですか？ この森」

「どうやらそうみたいですねぇ」

この区域全体にエラーが出ているみたいですよ、と彼は肩を竦めて答えた。

「あんたら修正プログラムでも対応しきれないのか」

「残念ながら」

打つ手無し——と云う訳か。

それかて彼は僕たちの脇を通り過ぎ、焚き火の上に手の平を翳した。

「兎に角この風でしょう？ さっきから体が冷えて冷えて……。すみませんが、少し当たらせて貰っても構いませんか？」

「好きにしろ」

兄さんがぶつきらぼくに許可を与えた。

「かたじけない」

そして彼は火の側に腰を下ろす。

「……これ。まだまだ熱いですけど。よかったらどうぞ」

先程の無礼の意も込めて、僕は旅人にコーヒーを勧めた。

「ああ。すみません。いただきます」

基本NPCの人たちは僕たちの好意に非常に素直だ。兄さんの好みでやや濃いめに淹れたコーヒーを彼は受け取り、そして有り難そうに啜る。

「はあ……落ち着く……」

AIなのに味覚が解るのだろうか。しみじみコーヒーを味わう姿に、僕はとても興味を覚えた。

兄さんもじつと彼を観察している。

「……？ なにか」

「いや……。本当に人間そっくりなんだな、と思って」

普段あまり街に居ない僕らは、こうしてAIと触れ合う機会が珍しい。

「元が人間を参考に創られてますからねえ」 この手のやり取りは

慣れた物なのか、不快感さえ顕わにせず彼は流暢に答えた。
このやり取りだって、予めプログラムされた物だとはとても思えない。

「まるで神の御業だな」

兄さんが感慨深げに一言。

「この世界じゃ人とAIなんて差ほど変わりませんよ——御馳走様」

カップを置いて、涼しげな目で彼は兄さんを見つめ返した。

「……どういう事ですか？」

興味をそそられ僕は訊ねる。

「この世界が現実と隔離されてからどのくらい経っているか、ご存じですか？」

「ええと……大体九百年くらいでしたっけ？」

学校に通っていない所為もあって、正直歴史に自信は無い。

「まあ、そんな所だと言われていますね」

「バグの所為で当時の記録が殆ど失われてしまったからな」

「王都に行けば少しは残っているんじゃない？」

大陸中央部のそこには、冒険者ギルドの総本部がある。

「残念ながらあそこの図書館も現在封鎖されてしまつて」

「また『バグ』か。厄介な物だな」

この世界を浸食し続ける不気味な闇。誰が仕掛けたのは解らないけど質の悪い悪戯だ。

「……あなた方人間なら、一度はこんな事を考えませんでしたか？」

やがて彼は、真剣味を帯びた声でこんな話を始めた。

「この電脳空間に存在するプレイヤーの命は、本来の現実世界に於ける彼らの寿命とリンクしています。当時の人間の平均寿命が凡そ百年。——尤も、この世界では直接肉体への医療行為は施せない為個々の健康状態を鑑みると、その数値はぐっと下がる訳ですが。」

人間の意識が電氣的に繋がれた空間ならば、本来ゲストである第一世代のプレイヤー達が死亡した際にこの世界もまた消滅している筈です。

なのに、未だあなた方の様な人間のプレイヤーが存在する。これは一体どういう事でしょうか？」

「……それは」

彼の真剣な眼差しに気圧され、僕は言葉が詰まる。自分たちの存在がイレギュラーな事。

彼が述べた通りだ。まさしくそれこそが僕が抱えている不安の正体そのものなのだ。

「……可能性は否定できないな」

神妙な顔つきで兄さんが彼の意見に頷く。

「俺たちは普通に親から生まれ、また子供を作る事が出来る。そういう緩い倫理プログラムでこの世界は造られているからな」

要するにこの世界でもセックスは可能という話だ。

「でも、その事自体本当はおかしな事なんですよ？」

そこで旅人はまた口を挟んだ。

「災害前のヴァルハラは厳格な倫理規定でプレイヤーの行動が縛られていたのに、例の事件以降はあなた方の行動は現実世界とほぼ変わらず自由です。

これは何も性の話だけに留まりません。あなた方は死ぬ。現実と同様、復活などあり得ない。それがあなたたちに貸せられたシステムの呪いです。

そしてログアウト不能となつて以来、書き換えられたプログラムの中、あなた方人間の各感覚野への刺激は過剰な一途を辿るのみとなりました。

今現在も尚進化し続けるヴァルハラのシステムに於いて、人間の存在って何なんでしょうね？

システムの為の奴隷？

我々AIの為にまるであなた方はこの世界に閉じこめられたかの様だ——」

「……ヴァルハラそのものに意識があると、あんたはそう云いたいのか？」 固唾を飲み込み聞き入る僕の隣で、兄さんは慎重に彼の意見を伺っていた。

「NPC排斥派の連中はどうやらその様に考えているみたいです」

全て人からの受け売りですよ、と彼は事も無げに兄さんにそう答えていた。

……まるでマトリックスみたいな話だ。

僕は以前シネマ座で観た大昔のSF作品の事を思い出していた。

あの物語はちょうど、過剰進化したAIによって、人類がサイバースペースの中に閉じこめられてしまったという話だ。

ヴァルハラにはまだ幾つか、当時のスポンサーが提供したそういう娯楽施設が残っている。

「——フランケンシュタイン・コンプレックス」

博学な兄さんがふと呟いた。

メアリー・シェーンの小説に由来するその言葉は、絶対的創造主である「神」に対する生命創造への憧れと、それら擬似的創造物が今度は同じ理屈で主たる「人間」への反逆を企てるのではないか、という猜疑心を表した造語だ。

「アイザック・アシモフの予言がここへ来て現実化したって訳か」

もしそうならこれは皮肉なもんだな、と兄さんは深く溜め息を漏らした。

「あり得ない話じゃ無いでしょう。排斥派の人達は、私たちNPCこそがシステムの手先では無いかと疑っているみたいですし」

「物騒な話だな」

「ええ、全く」

お陰でいい迷惑ですよ、と男は疲れた様に肩を竦めた。この人もまた身に覚えがあるのだろうか。

僕は考えた。

……もしそうなら、それは僕たち人間全体の側に罪があるのでは無いだろう……。

火の粉が勢い良く僕の目の前で弾けた。

「あなた方はこれからどちらへ？」

暗い話に嫌気が刺したのやも知れない。少し間を置いて、彼が話題を切り変えてくれた。

「エンリルだ。明日にはオゼの峠を越えようかと思っている」

兄さんは答えた。

「あそこはこの辺りでも一番の難所でしょう」

「急ぎの用事があるんでね。なに、毎年通る場所だから慣れてはいるぞ」

「無理をなさらないで下さいね」

「ああ、分かっている」

夜も大分更けてきた。疲れを残さない様に、僕はそろそろ寝なければならぬ。

「兄さん、僕先に戻ってるよ」

「ああ。お休み」

おやすみなさいと、立ち上がると旅人にも声を掛けられた。まだ兄さんは起きて話を続けるらしい。

寝袋に戻った後も、二人の会話が微かに聞こえた。

眠気がやがて訪れた。

僕は夢も見ず、朝までそして眠った。いつの間にか、僕は気づかぬ間に深い眠りの底に落ちていた。

6 出発

夜明けまでもなく、目が覚めた。寒気を振り切るように寝袋から這い出て、テントの外に出る。

今朝も相変わらず寒い。土の上には霜まで降りている。山の上の方では雪が積もっているかもしれない。

「――よし」

気合い一番。今日はやらねばならない事が山ほどある。まずは身支度だ。桶と手ぬぐいを持ち、僕は顔を洗いに行く。

「おお、早いな」

夕べの焚き火の後から、うつすら煙が立ち昇っている。ジョエルが火を起こしていた。

「おはよう」とお互いに挨拶を交わして、僕は水を取りに行く。

飲料水は荷台の樽の中だ。

蓋を開けると、水の表面には薄く氷が張っていた。

今朝の気温は氷点下か。寒いわけだ。

顔を洗い終えてから、飼い葉を積めた桶を持って、馬の下へゆく。僕たちが飼っている馬は、ハリーという名前だ。嘗ては農耕馬として飼われていたものらしい。

人間に限らず、ヴァルハラの中に登場する動物は、すべてがあまりにもリアルだ。

草をはむハリーにブラシを掛けてゆく。野性味あふれる逞しい筋肉の盛り上がりは、見ていて惚れ惚れする程だ。

「今日も一日頼むよ」

ハリーが尻尾を揺らし応える頃には、ようやく皆もテントから起き出してきた。サヤの姿も見えた。

「おはよう。今日は起きて大丈夫なの？」

「うん。夕べ汗をかいたらだいぶ楽になったわ」

声を弾ませて言うサヤの顔色は確かにみちがえる程良い。これなら今日一日持ち堪えそうに思えた。ただ無理はしないでね、と僕は念を押す。

朝食を食べ終えてからは、テントを片付け、それから各自の装備を身に纏う。

ギルドに登録した僕の職業は、攻撃と守備のバランスが良い傭兵^{ソルジャー}だ。

フットワークの良さを活かした軽装系の装備で身を固める。

胴周りのみプレート・メイルに革の小手。鉄の肘当て。中古品だけれどよく僕の体に馴染んでいる。

臍も同じ素材のブーツに履き替えて、盾は受け流しのしやすい小型のバックラー・シールドを愛用。

よく砥石で研いだ短剣を腰に挿し、ショート・ソードを鞘に納める。包帯や傷薬一式が積まったポーチをベルトで留め、位置を整えれば完了だ。

同じ前衛職でも、更に攻撃力重視となるエイザは鋭い薙刀^{グレイブ}を愛用している。

古の剣闘士が着用していた、ロリカと呼ばれる青銅製の胴甲に紅の額当て。

騎士である兄さんはサーコートと呼ばれる羽織に鎖帷子を着用。得物は重厚な長剣。

中盤に控える盗賊のラッドは、丈の短い革のベストに銀糸で編ん

だ手袋を着用。神父であるジョエルも同じ物を愛用している。二人の得物は弓と猟銃だ。

最後に魔導士であるサヤとカナの二人は、長袖のタブレットに獣革のローブを使用。

但しサヤは剣術の心得があるから、カナを援護する形で前線に立つ事もあるだろう。

病み上がりなのであまり無理は出来ない。僕も出来るだけサポーターに回るつもりだ。

「よし。みんなもう準備は出来たか？」

最後の荷物を詰め込んだ後でジョエルが皆に訊ねた。手綱を引き、やがて僕たちは森の中を進み始めた。

今朝になり、臓界塔のエラーは解かれたらしい。

一時間ほどで、すんなり森を抜けられた。

足音にやがて緩いせせらぎの音が混じり始めた。

溪流に出た。

折れた流木が幾つも川の中に横たわっていた。

広葉樹は悉く木の葉を散らしている。あと一月早ければ、ここは絶好の紅葉スポットだろう。ニジマスが釣れるのになあ、と川底を見つめながらラッドがくやしそうに呟いていた。

川幅はそれほど広くもない。橋が無い為、底の浅い場所を選び進む。

器用に岩の上を飛び越えて行く。

反対側へ抜ければ、また暫くは森の中だ。沢の中に徐々に巨石が混じり始める。

元々この辺りは雨が降りやすい土地だ。大雨で押し流された岩は、

無数の亀裂に割れて天然の障害物となる。

足場の悪い岩場に車輪を取られ、馬車が大きく傾いた。

「みんな、押せ押せ！」

冷たい沢の水に両足を水に浸かりながらの作業は、非常に難儀を伴った。

ブーツの中に水が染み込む。

畜生、水が刺すように冷たい。

「ほら！ 腰に力を入れる」

「言われなくても分かってるよ！」

エイザの叱咤にラッドが悲鳴を上げた。

「ぬあああ……っ！！」

歯を食いしばり荷台を支えた。額に汗が滲む。車輪が少しだけ傾きを戻した。あと一押し。

「ぐあっ！」

精魂尽きるようなその一声と共に、台車が前に進んだ。カナが鞭を入れる。沢を抜けた。皆息が上がっていた。

「休憩、休憩！」

「何言ってるんだ。こんなの序の口だぞ」

息喘ぐラッドに、平然と澄ました顔で兄さんはそう告げるのだった。

「……お前の兄貴はどういう体の作りをしてんだ」

「知らないよ」

岩場に腰を降ろそうとしたラッドを急かして、僕たちは更に谷の奥を目指した。

7 狂う世界の先で

溪流を越えて滝の前を通り、そして山道に出た。緩い勾配が続く。岩肌剥き出しの斜面の片側は、断崖絶壁となっている。

崖下をのぞき込めば吸い込まれそうな程高い箇所を、僕たちは慎重な足取りで一歩一歩登って行く。

オゼの山一帯には豊富な地下資源が眠っている。

昔はドワーフたちが鉱石を掘り、そこで豊かに暮らしていた。

彼らの土地を奪ったのはかつてのプレイヤー達だ。

ヴァルハラに閉じこめられたプレイヤーは、彼らAIとの共存を望まなかった——否、望めなかった。

望む余裕も無い程に、当時の人間は追い込まれていたのだ。

彼らを追い詰めた直接の原因は、僕らが「浸食」と呼ぶ異常な空間の出現だった。ログアウト不能後に突如現れたこの空間は、全てを消去しながら徐々に大陸を飲み込んでいった。

システムの暴走に伴い、仮想空間内に閉じこめられたプレイヤーに与えられたのはリアル・デス——本物の死だ。

怪我。事故死。モンスターとの戦闘における死。そして復活項目の削除。

システムの暴走による、過剰なまでの諸感覚の引き上げは、初期の空腹感だけには止まらず、やがて体調異変による病死や疫病といった深刻な弊害をプレイヤーにもたらした。

本来タブー項目である筈のプレイヤー同士の殺人や、強姦、自殺といった倫理プログラムの消滅は、これまでゲーム内に存在していた秩序を一気に崩壊させ、プレイヤーを恐怖のどん底へ突き落とす。現実と何らか変わらぬ危険へのリスクに脅え、安全領域である町へ引きこもるプレイヤーは後を絶えなかった。

だが、そんな彼らの行動をあざ笑うかの様に、狂ったシステムは

これまであり得なかった筈の都市へのモンスターの侵攻を許可する。

——虐殺が始まった。

いったい何人が犠牲となったのだろう。

そうして、ヴァルハラは唯のサバイバル空間へ姿を変えた。

消滅した安全地域を追われ、各地を放浪するプレイヤーはやがて身を寄せ合い新たな都市を築いた。

連合ギルドは住人の安全を保障する代わりに、一定の税を貸せた。貧富の差が生まれやがて支配層が弱者を虐げ始めた。

アトランダムに現れる浸食は時に、住人がこれまで築いた財産を一瞬にて奪い、そうしてまた厳しい放浪生活を強いらせる。

変動し続ける過酷な環境下で、やがて人間は戦争に明け暮れた。

先住民であるAI達への迫害も、実はそうしたやむを得ない事情を孕んでいた。

……………けれども——

「……………やり切れないんだ」

石を積み上げただけの簡素な墓の前に、萎れかけの花が一輪置かれている。

僕は沈痛な表情を浮かべそれを見つめていた。

——風よ

山の神よ

偉大な父と精霊よ

願わくは御名を崇めさせ給え

隣ではジョエルが十字を切り、彼らに冥福の祈りを捧げている。

——彼らの御霊を救い給え

汚れし者から守り給え

我らの罪を救い給え

試みに遭わせず、悪より救い出したまえ——

「……人間の業だな」

鎮魂の祈りは彼らの元へと届いただろうか。

少し離れで、まだ祈りを繰り返すジョエルを見つめながらぼそりと兄さんが呟く。

兄さんに言われ、僕は手向けのウイスキーを彼らの墓前に置く。

「……誰がこんな酷い事考えたんだろう」

サヤとカナが、近くに咲いていた花を同じく墓前に供えていた。

「人間を嫌ってる奴じゃないのか」

「——その人ってきつと、神様さえ信じていなかったんだろうね」

「寂しい奴だな」

「哀れなだけだよ」

蕭々と吹き付ける風が、僕らの髪を浚った。

「寒みつ！！　なあ、さつさとこんな山下りちまおつぜ」

ラッドが肩を震わせながら言った。

「そうだな。そろそろ行くか」

踵を返し、みんなと共に歩いて行く。

未だ吹き続ける風は、まるでドワーフ達の嘆きを代弁しているかの様に僕らの耳には届いていた。

8 s t i n g e r (前書き)

10 / 25

前回の戦闘シーンを全て書き直しました

8 s t i n g e r

虐げられた者達の恨みは何処へ行く？

——彼らはAIだ。感情は無い。

例え、感情を持ち得る存在が生命であると定義したとしても、電脳空間内に於いてAIは所詮AIに過ぎない。

物理的な肉体を持たないプログラムを消去する事のどこが罪に当たるのか。

彼らを殺戮した人間は口々にそう主張する。

だが、彼らの魂は確かに存在する。

こう考えてみてはどうだろう。有機的・或いは電子的という物質の垣根を越え、生命の本質がある一定の指向性を持つ、意識のクラスター（集合体）だと仮定する。

ならば、死とはそのクラスターの消滅そのものを意味し、また殺人とは他者による器の破壊の事だ。

突き詰めるところ、つまり命とは情報のやりとりなのだ。

そして罪とはそれを故意に破壊する事。

世界は情報のやりとりで構築されている。無限の膨張を繰り返し、今や生命誕生のシステムさえ構築したサイバースペースは、最早第二の宇宙と呼ぶにも相応しい。

因果応報。

万物に宿命付けられたカルマは、理想の形を追い物事を形作る。

そして、そこへ至るの為の情報構築を妨げているのであれば、やはり人間の行動は罪と呼ばざるを得ない。

僕たちは今、過去の支払わされる。

—— C A T I O N

—— C A T I O N

ふと。

がらりと手間の斜面で小さな落石が起った。

「ん？」

不意に違和感を覚え僕は上を見上げた。

「敵だ！ みんな散れ！」

急にラッドが大声を上げ、僕を押しのと同時に弓矢を構えた。番えられた弓がぎりりと引き絞られ、直後放たれた矢が崖の上に立つ何かを射抜く。

前方五メートル程の空間に、警告ウィンドウが突如出現。

半透明なスクリーン越しに、僕は敵の姿を捉える。

レベル26。この地域に出没する危険な野生動物。ステインガー・バニー。

僕は慌てて剣を抜いた。数は4体。いや——更に増えた。

「みんな下がれ！ 落石に巻き込まれるぞ」

強靱な後ろ足を持つ奴らは、その脚力を活かし上から岩をたたき落としてくる。

糞、走れ！

馬車に鞭を入れたカナを追って、僕は駆ける。

奴らは狭い足場で僕らを分散させた後、個々に奇襲を仕掛けて獲物をしとめるつもりだ。兎のくせにやたら知恵が回る！

斜面を大岩が転がり落ちてくる。

軽装のラッドやサヤに追い抜かれ、僕はどうしても彼らと距離を開かざるを得ない。

くっ——鎧が重い！

鍛えられた兄さんやエイザの足は、重装備も難なく僕より先を走ると云うのに。まったくなんてざまだ！

息が上がる。

いっそ止まってやり過ぎすか。

いや、駄目だ。

低レベルな僕なら奴らに囲まれ数分と持たないだろう。

既に落石は数個地面に落ち、それを追う様にして敵は斜面を駆け下りてくる。糞、もう覚悟を決めるべきなのか？

「——！！」

そうして手前の大岩を僕が躲そうとした時の事だった。僕は蹴躓いた。

否——足下から伸びた何か（・・）が僕の足首を掴んだんだ。

（——！？）

僕は突如バランスを崩し倒れる。

顔が地面に近づく。

駄目だ。敵がすぐ側に迫ってきていると云うのに。

「ウル！ そのまま起きないでいて——！！」

突如サヤの声が耳を突いた。

「踊れ——！！」

力強い、バースト・スベル詠唱破棄による緊急魔法攻撃。

僕の背中の上を、熱い炎が駆け抜けた。

ファイア・ボール。

ヴァルハラでも最もポピュラーな攻撃魔法の一つだ。発動時間が極めて短い為先制攻撃にもお得。

彼女の火の玉は最前列の一匹を捉え、そのまま奴の動きを止めた。ごめん、助かったよ。

何かが僕の右足首を掴んでいる。

こなくそ！

折角サヤが助けてくれた好機を僕は逃すまいと、腕を振り回しそいつに剣を叩きつけた。――外れた！

急ぎ僕は立ち上がり、みんなの後を追いかけんとす。

先程の正体を僕は視界に捉える。

「く！ こいつら何なんだよ！！」

見ればラッド達もまた同じ攻撃に立ち往生している。

地面から伸びる二本の白い腕は、生前この土地に捨てられた死者の骨だ。

即ち――スケルトン。さまよえるドワーフ達の怨念。

「厄介ね！ 次から次へと！」

今こそ復讐を果たさんと、地中から無数に生えてくるそれを、エイザは長刀で尻ぎ払う。

だが攻撃を逃れた骨は、完全に地中から姿を現し武装した骸骨となつてこちらに襲いかかってくるのだ。

ドワーフ達は元、屈強な肉体を持つ優れた種族だ。死して尚、どうやらその特徴は薄れないらしい。

豪快な一振りが僕の脳天を狙う。錆びたハンマーの射程を逃れ、懐へ飛び込んだ僕はわき腹へ剣を叩きつける。西洋剣は元々斬撃より打撃に重みを置いた武器だ。

体重を乗せた一撃は劣化した骨を砕き、そのまま背骨を貫通して

スケルトンの体を二つに分かつ。

「頭を潰せ、頭を！ でないと奴らいつまで経っても動くぞ！」

詠唱中のサヤを庇う様立ち回るジョエルは、手にした猟銃でスケルトンの頭を撃ち抜きながら仲間にもそう伝える。

「サヤ！ 一旦向こうはいい。こっちを先に片づけてくれ——」

敵の攻撃を弾き返しながら兄さんが指示を出す。サヤは頷き返す。

『“爆ぜよ”』

サヤが振り上げた腕の先から、光の帯が伸びて周囲の敵に絡み付く。

あたかもそれは爆導索の様な仕掛けだ。彼女が唱えた呪文は、急速な燃焼の為に必要な元素の変換コード。

真っ白な閃光が敵の体内に生まれた。秒速数百メートルの勢いで膨れ上がる空気が、爆風を伴い奴らの体を引き千切ったのだ。

「く！」思わず目を瞑る。

衝撃波が僕の鼓膜を震わせた。熱風に思わず顔を被った後で、焼け焦げた地面の上には何も残らなかった。

ジャツジメント・ブレイズ——灰すら焼き尽くす超高熱波呪文。攻撃結果表示の数値は四千台後半を叩き出している。

まだ僕の耳がきんと耳鳴りを続けている。

数字で僕らは命のやり取りを繰り返している。

一瞬でも気は抜けない。

——でも。それは全く嫌な気分だ。まるで数字に命を弄ばれてい

るみたいで。

計算。

ダメージの演算。

目の前に移る個々のHPの表示が僕は恨ましい。

そんなもので僕たちの命を決めるな。

ヴァルハラは確かに命懸けのデス・ゲームだ。

でもそんな数字で未来を縛られるなんて僕は――御免だ！

背後から斬りかかるスケルトンの攻撃を躲す。剣の腹で受け流す。

盾で突いて、その隙に眼窩へ僕は切っ先を叩き込む。

ダメージ1625。クリティカル・ヒット。

そんな表示見たくは無いのに！

また一つの命が散る。

僕が殺す。

呪ってやる！

呪い返してやる！

ふざけるな。

ふざけるな畜生！

何体そうして葬ったかもう分からない。

僕の手は血塗れで、戦闘が終わった時僕は確かに気持ちが悪かった。

頭が重い。

「ウル！？」

疲れた。

もついいから誰か休ませてよ。

サヤが瞳が驚愕に見開かれ、僕の名を呼んでいた。

僕の意識が、そこで不意に途切れた。

9 異国の窓（前書き）

11 / 6 加筆修正しました

9 異国の窓

目覚めた場所は、とあるベッドの上だった。

この部屋を知っている。

天井を走る木の梁からは、年代物のランプが吊り下げられていた。壁は控えめな花模様。飴色の洋服箆笥と、小さな机。

調度品はどれもシックに抑えられ、大人しくもこざっぱりした印象を与えている。

（……そうか。僕……）

ぐるりと部屋を見渡した後に、僕は既にエンリルに着いていた事に気づく。

ここは、木菟亭^{みみずく}。ジョエルの親戚が経営する、毎年冬になると僕達が世話となる馴染みの宿だ。

外の様子を見ようと、ベッドから起きあがると窓は結露で曇っていた。この地方の冬は長い。雪が吹き込まない様、窓の面積は小さく取り、その影響で昼間でも部屋は薄暗かった。

今……何時だろう。どれだけ眠っていたのか気になり、僕は壁に掛けられた鳩時計を見た。

真鍮製の針は、午後三時を指している。その下のカレンダーはクリスマスの絵柄。月が変わっていた。昨日は十一月の最終日だった筈。

じゃあ、あれからほぼ丸一日眠り続けていたという事が。

疲れは想像以上に溜まっていたらしい。そういえば夢も見なかった事を思い出す。

体を軽く捻ってみる。うん、どこも痛くは無い。妙な凝りも無く素晴らしく調子はいい。

大抵長旅の後は筋肉痛がひどいものだが、背中と左肩に貼られた湿布のお陰でそれも無い。ややハツカに似た匂いがする。この宿特性だ。

後で女将さんにお礼を言っておこうと思い、僕は着替えて廊下に出た。

じんわり暖房が効いていて暖かった。

端の階段の方から子供達の声が複数聞こえた。

「もういいーいかい」

「まあーだよー」

僕は一階のロビーでカナの姿を見つけた。宿泊客の子供らとくれんぼをしていたらしい。

「カナ。他のみんなは？」

「知らない。おじちゃんだけはまだあそこにいるよ」

カナが指した先には、カウチに腰掛けるジョエルの姿があった。おやじさん、と僕が呼び掛けると読みかけの新聞からこちらへ視線を寄越した。

「お。ようやく起きたか。体の具合どうだ」

「ああ、もう大丈夫です。すみませんここまで運んでもらって」

「いやいや、気にするな。お前も疲れていたんだろ？」

ジョエルは気さくに僕に話しかけてくれた。

「それで、今他のみんなは？」

「ああ、みんな揃って出掛けちゃったぞ。クラウスがギルドホールに用事があるって言ってたしな――。ああそうそう、お前も後で更新の手続きして来いよ。俺達はもう先に済ませちゃったから」

冒険者カードをこちらに投げて寄越した。これは身分証明の他に

各種割引手当、その他キャッシュカードの機能を併せ持っている。

「わかりました」

「ん。取り敢えず、腹減っただろ。飯食って来いよ」

今は食堂は開いていない為外へ出る必要があった。その前に一風呂浴びてからにしようと、僕は部屋へ戻り下着とタオルを持った。宿の人が洗ってくれるので、洗濯物もまとめて籠に入れて、部屋の外へと出た。

伸びてき前髪がそろそろ煩わしかった。

それを気にしつつ階段を降りていると、途中息を弾ませて駆け上がるカナと親父さんにすれ違った。

「あ。ウル、ね、凄いよ。一緒に行こう」

僕はカナに腕を掴まれた。

「？ 凄いつて、何が？」

「飛空艇だよ飛空艇！」

「飛空艇い？」

そのままぐいと腕を引かれ、僕は三階へと連れて行かれた。その階のテラスに人が集まっている。

「おおー」という歓声があちらこちらから聞こえている。

「あ、見て見て！あれあれ」

「ほっ、でかいな」

カナが指さした方角は、丁度町の中心部となる大聖堂の辺りだ。その上空を、ゆっくりと旋回する巨大な影が見える。

舳先をこちらに向け徐々に近づいてくるその船は黒一色に染まり、脇腹に複数の砲門が見える。あれは軍艦だ。

「こっちにくるぞ」

「かつこいいい！」

僕の前に立つ男の子達は、興奮した様子でおいと手を振っていた。

それにしても大きい。全長五百メートルはあるのではなからうか。巨大な船体の下に隠れてしまった区画は、すっかり日光を奪われまるで夜が来た様に暗い。城が空を飛んでいるかの様だ。

突風が急に僕の髪を煽った。飛空艇のプロペラが生んだ風だ。それに背後の窓ガラスさえ軋んでいる。

オオオオ……

空気が微かに震えている。

頭上を通過するその巨大な船の姿に、思わず空唾を飲み込んだ。皆呆けた顔で空を見上げた。

「行っちゃった……」

目の前の檣の木が、まだ風に揺れていた。

「凄かったな。こっちに飛空艇が来るなんて滅多に無いのに」

「また見れるかな？」

「さ、冷えるから戻ろう」

終わってしまった壮大な見物の後に、ぞろぞろと列を成し見物客達は建物の中に入っていた。

「フォートレス今のは要塞級ですな」

まだテラスに残る一人の客の声を聞いた。

「東部同盟の船ね」

「穏やかではありませんなあ」

何となく気になり、僕は振り返って聞き耳を立ててみた。彼は隣に立つ若い女性と話込んでいた。

「随分と強引な手で来たわね」

「まあ、今度の戦はどうしてもエンリルの協力が必要でしょうから」

戦だって……？

「市長が頷くと思う？」

「それはまだ何とも」

「嫌な空気ね」

そんな会話を続けながら、こちらへ戻ってきた二人に僕は道を譲る。

後で新聞を読もうと思った。平和なエンリルが戦争に巻き込まれる可能性があるのか……？

僕は何故か、この時湧いた不安の正体を知らねばならないと云う、奇妙な使命感が芽生え始めていた――。

10 不穩の町（前書き）

1
2 / 2
推敲

10 不穩の町

町の中央に聳える時計台の外壁を、斜陽が赤く染め上げている。時刻は間もなく、四時を迎える。

冬の日没は早い。暗くなり始めた市庁舎の執務室では、まだカーテンも引かれず、エルザ・リーベルトは悩ましげな表情を浮かべていた。

「はぁ……」

端正なその顔の唇からこぼれるのは、先程から重い溜息ばかり。背中を預けた木の椅子が、ギイと軋みをあげている。逼迫した状況を表している様にも思える。気分が滅入ってきた。

「……嗚呼」

呻き声を発した後、ちらと視線を背後へ向ける。

庁舎の窓からは、市内の様子が一望できた。

屋根。屋根。屋根。市街地を流れる川。

運河の畔には、商業地の倉庫が並ぶ。

鐘楼の鐘の音がちょうど響いてきた。馬車が通うメインストリートに、ガス灯が灯る。

一般市民が暮らす家々の屋根からは、そろそろ夕餉の煙が立ち上る時刻だろう。

週末の賑わいに湧く酒場を、エルザはそつと想像してみた。

築三百年を超える城壁に囲まれた、この辺境の都の平和が脅かされつつあるとは、一体誰が知り得ようか。

平和の天秤が傾きつつある。

先程秘密裏に開かれた緊急会議を思い出す。エルザは強い不安に駆られていた。

自分の決断は本当に正しかったのだろうか……、と。

でも、そうするより他に仕方が無かった。エンリル市は、東部同盟と云う驚異を前に、これを敵に回す事だけでは何としても避けね

ばならなかったのだから――。

――東部同盟。

それは、海上貿易国ミラギ。

砂漠の国イスファーン。

そして、工業大国カルカディアの三ヶ国により結成された、世界の覇権を唱える巨大な軍事機構である。

浸食被害の最も激しい地域に属するこれらの国々は、深刻な食料危機を抱えていた。

規模は違えども同様の被害により余裕の無い国々は、彼らの支援を見捨て難民の受け入れさえ拒んだ。

窮地に追いやられた三つの国々は共に結託し、周辺諸国へ侵攻を開始した。

貿易国として海上輸送に長けたミラギ。イスファーンの怪しげな古代魔法。そして、カルカディアの高い工業技術力。

三本柱に支えられた軍勢は、驚異的なスピードで瞬く間に他国を占領。

今もなお戦火を拡大し、僅か二年の内に中央大陸の領土三分の一を手に入れる程、巨大勢力へと変貌を遂げていた。

領内NPCの虐殺だけには止まらず、選民思想を掲げ、敗戦国に圧政を強いるこの軍を恐れる者は多い。

1,500万と云う圧倒的兵力の前には、人類最後の希望と呼ばれた西の王都・トラピアが抱える聖騎士団パラディンズでさえ太刀打ちできなかった。

彼らへの隷属を拒み、北へと移動する難民の数は日々増加していた。

中立都市を自称するエンリルはこの受け入れに好意的であった。だが、物には限度と云うものが裏には存在する。

許容量を遙かに上回る難民の対応に追われ、役所は日々徹夜の毎日だ。

住民登録さえまみならず、犯罪が横行し始めたその矢先に、今日になり突然東部同盟の訪問である。

あまりの激務に駆られ、職員一同は悲鳴を上げた。

最新鋭の軍艦という、武力をちらつかせた彼らの要求は、エンリル市が保有する鉱山の買い占めであった。

連中は戦時に欠かせない貴重な鉱物資源を欲している。

戦線は日々北上の一途を辿っている。徹底抗戦を唱える隣国・ウィアの攻略に備え、彼らはエンリル市を補給線上に組み込むつもりなのであろう。

元、軍人の出であるエルザには、それが容易に想像できた。

（ただでさえこの忙しい時期に……！）

苛立ちを募らせるエルザは、ガラス製の小瓶を掴み、床の上へと叩き付けていた。

インクの壺は棚の角に当たり割れ、破片と一緒に黒いインクが絨毯の上に飛び散った。

巻き添えを食らい汚れたスラックスの染みは、拭っても決して落ちそうには無い。

汚い東部同盟流石汚い。

ふと古のネットスラング——九百年も過ぎた時代では、流石にこれは死語だ——をエルザは口にする。それで事態が改善するのであれば幾らでも罵ろう。

けれどもこれは現実逃避だ。

バグの影響はこの北の地にも及んでいた。

近年、大量に発生するモンスターの駆除に追われ、エンリル市の主産業である、鉄の輸出量は軒並み下がってきていた。

何か対策を打たねばこの町は失業者らで溢れかえってしまう。難民の問題もまた一向に改善を見いだせない。

暴動の発生をエルザは一番に恐れる。この不穏な状況下だ。何か

きっかけがあれば、それは一気に飛び火しこの町を飲み込んでしまう事であろう。

故に、こちらから資源を提供する代わりに、東部同盟側には鉾山に兵を派遣すると云う案をエルザは市議会に提案した。

所詮はその場凌ぎ。分かっている。

何故ならばそれは、他国の軍隊の駐留を許す格好の条件を与えてしまう事に他ならないからである。

「市長、それは……」

さすがに性急過ぎやしないかと、一部の慎重派から案の定反対意見が挙がる。これもまた、エルザの予想の範囲内だ。

「……いずれは飲み込まれるのよ」

町の代表として呼びかけたギルドマスターらに、ただ淡々と事実のみをエルザは口にする。その発言に場内はひどくざわめいた。

苦渋の末の発言である。最早冷血女、と罵られようと仕方がないとエルザは覚悟を決めていた。

それともこれは、単に意気地なしの諦めなのだろうか。

「明日、多数決を取りましょう」

エルザの発言の後に、議会が一時中断される。

ふと窓の外に目を向ければ、平和の象徴である鳩が、見限った様に彼女の目の前から姿を眩ませた。

縫れる物など、最早ここには無いと告げているかの様。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9465w/>

白いヴァニタス

2011年12月2日19時49分発行